

# テイルの習得に与える母語の影響

## —動詞の語彙的アスペクトに着目して—

砂川有里子（筑波大学名誉教授）

Sunakawa001@mac.com

### 【要約】

本稿は、日本語教育の初級の段階で導入されるにもかかわらず、上級になっても問題を抱えるテイルの進行中と結果状態を表す用法について、これらの習得に母語の影響があるかどうかを確認することを目的とする。異なる6つの言語を母語とする中級後半レベルの学習者を対象に絵描写タスクで得られた発話データを調査した結果、従来述べられていた習得順序と異なる結果を示す母語話者グループがいることなど、同じ中級後半レベルの学習者であっても、習得状況に母語話者グループによる異なりが少なくないことが明らかになった。

### 1. はじめに

日本語のアスペクトは、出来事をまるごと1つの事象として捉えるか事象の一部に着目して捉えるかによって、完成相「スル/シタ」と継続相「シテイル/シテイタ」の対立として現れ、さらに、継続相は、動詞の語彙的アスペクトや前後の文脈により「進行中」「結果残存」「繰り返し」など種々の用法に分けられる<sup>1</sup>。以下においては「シテイル/シテイタ」とその縮約形「シテル/シテタ」を代表する形態を「テイル」と表示する。また、完成相の「スル/シタ」は、それぞれ「スル」と「シタ」と表示する。

日本語教育ではテイルを初級レベルの文法項目として扱い、比較的早い段階で導入するのが普通である。しかし、継続相のうちで最も基本的とされる進行中や結果残存の用法でさえ、上級になっても十分に習得されない状況がある（砂川 近刊）。そこで本稿では、母語の異なる中級後半レベルの学習者を対象を絞り、絵描写タスクの発話データにおけるテイルの使用実態の調査を行い、進行中と結果残存の習得に見られる母語話者ごとの特徴を探ることとする。

### 2. テイルの習得研究

テイルの習得に関する研究は、中国語、英語、ロシア語など、特定の言語話者に見られるテイルの使用実態を調査し、テイルの習得順序や誤用の要因を明らかにしようとするもの（黒野 1995、許 1997、菅谷 2004、松井 2008、折原 2019、冉 2021、砂川近刊など）と、アスペクト仮説、プロトタイプ理論、

<sup>1</sup> 庵（2021）は、上述の用法の他に、「経験・記録」「完了」「反事実」「形容詞的用法」を挙げている。

処理可能性理論などをもとにしたテンス・アスペクト形式の普遍的な習得パターンに照らして日本語のテイルの習得のありかたを解明しようとするもの(許 2000、小山 2004、菅谷 2004、Sugaya & Shirai 2007、稲垣 2011、陳 2015、峯 2019 など) の2つに大きく分けられる。

特定の言語話者を対象とした前者の研究ではその大半が結果残存より進行中の習得が早いと述べ、さらに、習得に母語が与える影響として、中国語の「在」が正の転移となる可能性や、「了」が負の転移となる可能性などを指摘している(許 1997、許 2005、冉 2018 など)。一方、母語の違いによらず普遍的に見られる習得パターンに注目した後者の研究では、アスペクト仮説に基づいた研究が少なくない(菅谷 2004、Sugaya & Shirai 2007、稲垣 2011 など)。アスペクト仮説とは、テンス・アスペクト形式の習得に動詞の語彙的アスペクトと関わる普遍的な習得順序があるというもので、日本語の場合、継続相のテイルは活動動詞(action verb)から習得が進むことや、過去形のタは到達動詞(achievement verb)から習得が進むことが予想されるというものである<sup>2</sup>。Sugaya & Shirai (2007) は、進行中を表す形態素がある言語とない言語を母語とする学習者の日本語を調査し、アスペクト仮説と母語の影響との関わりを考察している。そして、基本的に学習者の母語にかかわらず進行中のほうが結果残存より習得が容易であるが、常にそれが当てはまるとは限らず、タスクのタイプや学習者の日本語能力の違いによる影響を受けること、また、手続き的知識が十分でないときには母語の影響を受けるが、習得が進んだ段階や手続き的な知識を必要としないタスクの場合には母語の影響を受けないことを述べている。

本稿が分析するデータは、絵を見せて即興かつ口頭でその情景を描写させるものであることから、手続き的知識を必要とするタスクによるものである。また、中級後半の学習者に限定した調査であることから、十分に習得が進んだ段階とは言えない学習者を対象としている。本稿では、これらの条件で学習者がどのようにテイルを習得しているか(または、していないか)を調べ、テイルの習得に母語の影響があるかどうかを考察する。これまでの研究では特定の日本語レベルの学習者を大量に集めて異なる母語話者の特徴を比較するといったことは行われていない。本稿は、大量のデータを格納した学習者コーパスを利用し、6つの異なる言語グループの学習者をこれまでにない規模で比較してテイルの習得に母語が与える影響を考察するところに特徴がある。本稿の具体的な研究課題は以下の通りである。

1. 動詞の語彙的なアスペクトの違いによってテイルの正用と誤用の現れ方にどのような違いが生じるか。
2. 母語の違いによる正用と誤用の現れ方にどのような違いが生じるか。

なお、以下においては奥田(1985)に倣い、テイルの形で進行中を表すタイプの動詞を「動作動詞」、結果残存を表すタイプの動詞を「変化動詞」と呼ぶことにする。

### 3. データの概要と研究方法

本稿の分析には、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』(中納言 2.4.5 データバー

---

<sup>2</sup> 「活動動詞」と「到達動詞」は Vendler (1967) の動詞分類によるもので、金田一 (1976) の「継続動詞」と「瞬間動詞」、あるいは、奥田 (1985) の「動作動詞」と「変化動詞」に相当する。

ジョン 2021.05) に格納された「絵描写タスク」を使用する。このタスクは、テイルが数多く使える場面を描いた図1のパネル<sup>3</sup>を見せて、そこに描かれた情景をできるだけ多く口頭で描写させるタスクである。



図1 絵描写タスクの絵パネル

I-JAS には海外と国内で集められたデータが収められているが、海外の学習者で絵描写タスクが実施されたのは8言語を母語とする教室環境の学習者557名である。本稿ではそのうちの中級後半に属する149名を調査対象とする。日本語能力の判定はJ-CATの得点に基づいている。J-CATとは、文字、語彙、文法、読解の4つのセクションで構成されたコンピュータ適応型テストで、満点は400点、中級後半の得点は201~250点である<sup>4</sup>。本稿ではこの範囲に収まる学習者のうち、人数が極めて少ない2言語の話者を除く6言語の話者のデータを使用する。また、対照データとして日本語母語話者50名分のデータを使用する。母語別サブコーパスの母語、IDの頭文字、人数、語数を表1に示す。

表1 母語別サブコーパスの内訳

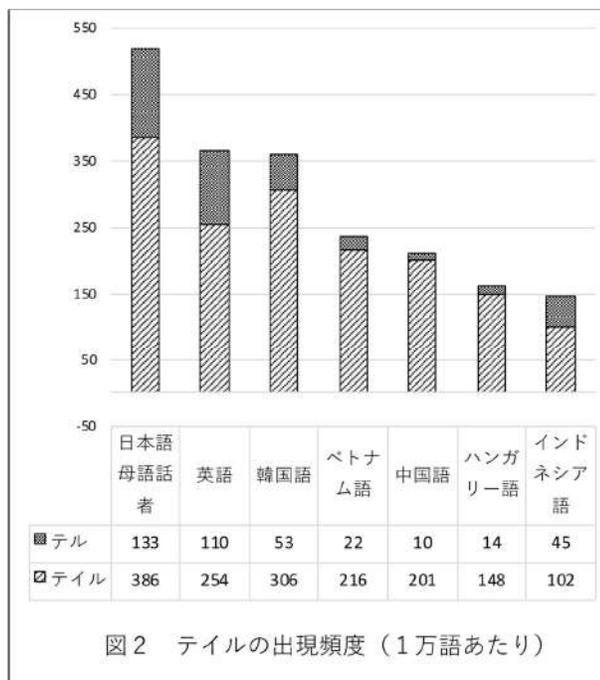
サブコーパス	IDの頭文字	人数	語数
	字		

<sup>3</sup> この絵パネルは許(1997)に掲載された絵を著者の承諾を得てI-JASの調査に転用したものである。

<sup>4</sup> 日本語能力のレベル判定は今井(2015)の基準に従った。

	日本語母語話者	J	50	18466
学 習 者	中国語話者	C	60	20032
	英語話者	E	9	3458
	ハンガリー語話者	H	18	6939
	インドネシア語話者	I	15	5304
	韓国語話者	K	29	9405
	ベトナム語話者	V	18	6022

図2は各サブコーパスにおけるテイルの出現頻度（1万語当たり）を多い順に並べたものである。この図に見られるように、テイルの出現頻度は、どの学習者グループも日本語母語話者より少ない。最も少ないインドネシア語話者は、日本語母語話者のわずか3割弱に過ぎないし、最も多い英語話者でも7割程度に留まっている。さらに、縮約形「テル」の比率は日本語母語話者で26%だが、英語話者とインドネシア語話者はそれを上回る30%以上の数値を示している。「テル」の比率が最も少ないのは中国語話者の5%である。「テル」の比率のこのような異なりは、教室で話しことば的な表現をどれほど指導されたか、アニメやSNSなどでどれほど自然な日本語に触れたかといったインプットの量や質が影響している可能性がある。



学習者のテイルの使用が母語話者に比べて少ないことから、学習者はテイルを使うべきところで正しく使えていないことが推測される。先行研究では、すでに述べたように、結果残存の習得が進行中の習得に比べて遅れることや、その要因が動詞の語彙的アスペクトの特性にあるということが指摘されている。そこで、次節では動詞の語彙的アスペクトのタイプ別、すなわち、テイルの形で進行中を表す動作動詞と結果残存を表す変化動詞のそれぞれにおけるテイルの使用状況を詳しく調べることにする。

まずは、動作動詞と変化動詞のうち、学習者と母語話者の双方、またはどちらか一方が数多く使用しているいくつかの動詞に着目し、テイルの正用と誤用を調査する。次いで、学習者のテイルの使用に母語による特徴が見られるかどうか考察する。

#### 4. 語彙的アスペクトのタイプ別調査

表2は母語話者と学習者が絵描写タスクで使用した上位20位までの動詞とその出現頻度を示している。動作動詞の中で学習者と母語話者の双方が多く使用していたのは「遊ぶ」「書く」「食べる」の3つである。一方、変化動詞の中で学習者と母語話者の双方が多く使用していたのは「倒れる」と「座る」の2つのみである。学習者だけが多く使用している動詞に「壊れる」があるが、母語話者はその代わりに「割れる」を多く使用している。そこで、「変化動詞」に関しては学習者と日本語母語話者の双方が多く使った「倒れる」「座る」の他にどちらか片方が多く使った「割れる」「壊れる」を加えた4つの動詞を調査対象とする。

調査の方法は、中納言を用い、それぞれの動詞の語彙素をキーに指定して用例を収集した。さらに、それらの用例を目視で確認し、正用と誤用のタグ付けを行った。正用と誤用の判定方法は以下の通りである。

正用：テイルを正しく使用している場合。

誤用：テイルを使うべきところで正しく使えていない場合。

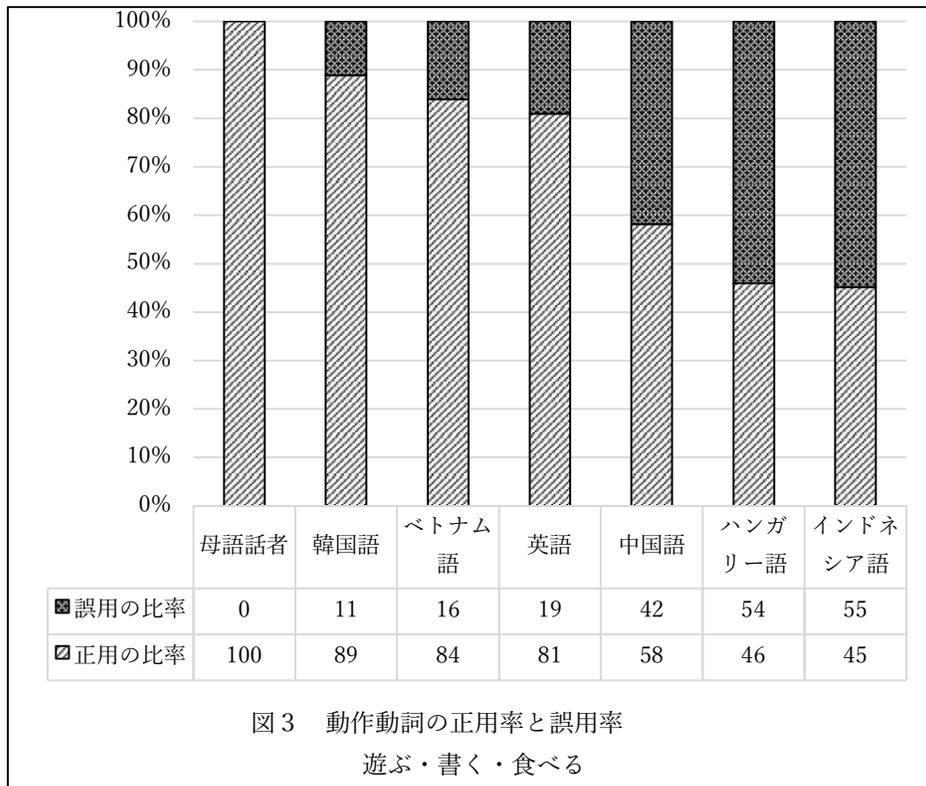
表2 動詞の語彙表

母語話者		学習者	
動詞	頻度	動詞	頻度
し	42	し	124
倒れ	31	倒れ	76
遊ん	23	遊ん	75
割れ	14	書い	73
かけ	13	座っ	47
書い	13	壊れ	46
出	13	着	39
座っ	12	持っ	38
飛ん	10	食べ	36
落ち	9	待っ	34
寝	9	寝	33
流れ	9	開け	32
歩い	8	かけ	30
なっ	8	流れ	28
見	8	歩い	25
食べ	8	開い	25
待っ	7	立っ	21
着	6	話し	17
折れ	6	見	17
晴れ	6	つい	17

なお、「～たり～たりしています(例:遊んだりお菓子を食べたりしています)」「～たり～います(例:遊んだりお菓子を食べています)」の下線部や「～て、～います(例:窓ガラスが割れて、キッチンではヤカンが沸騰しています)」の下線部は正用と判定した。ただし、「割れてひどい状態になっています」や「窓が割れて風が吹き込む状態です」のように、付帯状況や原因を表すテ形は対象外とした。また、「書きます、書いて、書いています」の下線部のような繰り返し部分も対象外とした。

##### 4.1 動作動詞（遊ぶ、書く、食べる）

この節ではテイルの形で進行中を表す動作動詞が継続相を表すのに正しく使えているかどうかを調査する。図3は「遊ぶ」「書く」「食べる」の正用率と誤用率を示したものである。学習者のうち、正用率が80%以上を占めるのは韓国語話者、ベトナム語話者、英語話者である。一方、ハンガリー語話者とインドネシア語話者は正用率より誤用率の方が高い。また、中国語話者は正用率が58%で過半数を超えるものの低い数値に留まっている。



以下に誤用例を示す。

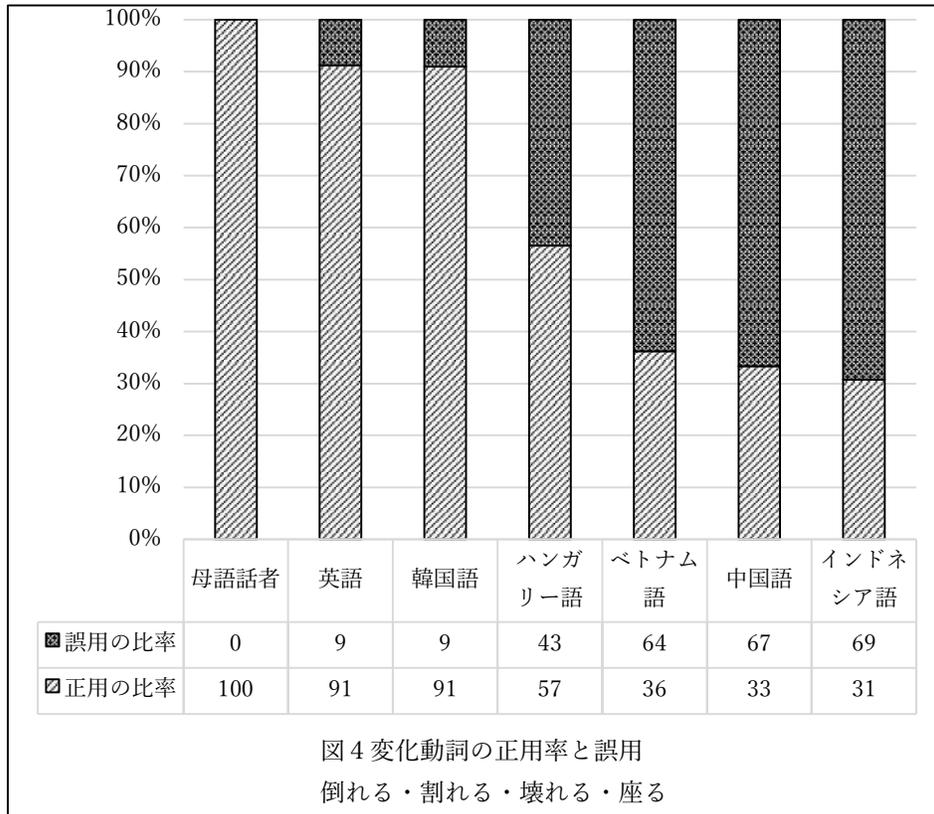
- (1) 子供たちが遊んだりします (HHG09)
- (2) 小さいの、男は、アイスクリーム、を、食べました (CCS47)
- (3) 周りを、見ながら、絵を書きます (IID56)

「書く」の場合は、テアルを用いた誤用が韓国語話者2名に観察された。

- (4) 画家が、何、何かを書いてありますが、何を書いてあるのは、よくわかりません (KKR11)

#### 4.2 変化動詞（倒れる、座る、割れる、壊れる）

この節ではテイルの形で結果残存を表す変化動詞が継続相を表すのに正しく使えているかどうかを調査する。図4は「倒れる」「座る」「割れる」「壊れる」の正用率と誤用率を示したものである。学習者のうち、正用率が90%以上を占めるのは英語話者と韓国語話者である。一方、ベトナム語、中国語、インドネシア語の話者は正用率より誤用率の方がはるかに高い。また、ハンガリー語話者は正用率が57%と過半数を超えるものの低い数値に留まっている。



以下に誤用例を示す。

- (5) 木が、あ一二つ、あ、二本あります。あ一本はこわ、あ倒れました (VVN31)
- (6) うちの外に、えと林檎の、林檎の一木が、倒れます (IID17)
- (7) カップルがうう座ったり子供たちが遊んだりします (HHG09)
- (8) ある人は、あー、公園の椅子に座って、いい天気、え、いいー、いい日、うーん、みたいですね (IID29)

「倒れる」「壊れる」の場合は、テシマウを用いた誤用が少なくなかった。

- (9) りんごの木が、二本あります。でもひあの一、一本は、倒れて、しまいました (HHG05)
- (10) 皿皿の皿が壊れて、そしてー、窓も壊れてしまいました (IID13)

また、1例だけだがテアルを用いた次のような誤用も観察された。

- (11) 今、窓が壊れてあります (EUS01)

#### 4.3 動作動詞と変化動詞の比較

この節では動作動詞と変化動詞の正答率に着目し、進行中と結果残存の習得について比較する。表

3は図3と図4から正答率のみを転記し、不等号記号を使って動作動詞と変化動詞の正答率を比較したものである（左側が動作動詞、右側が変化動詞）。

表2 動作動詞と変化動詞の正答率

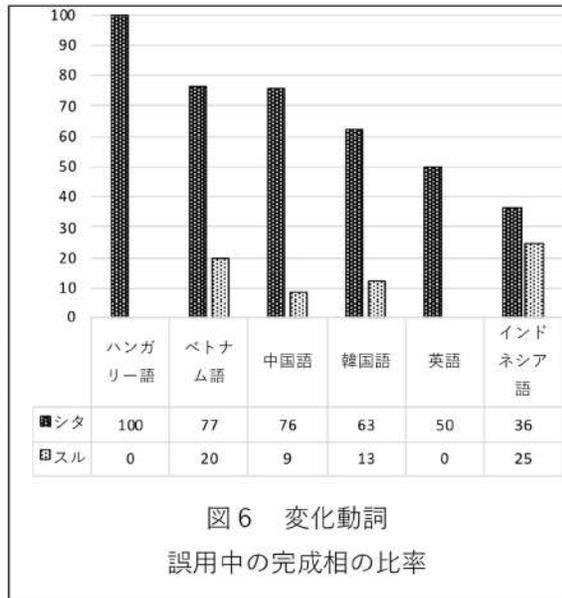
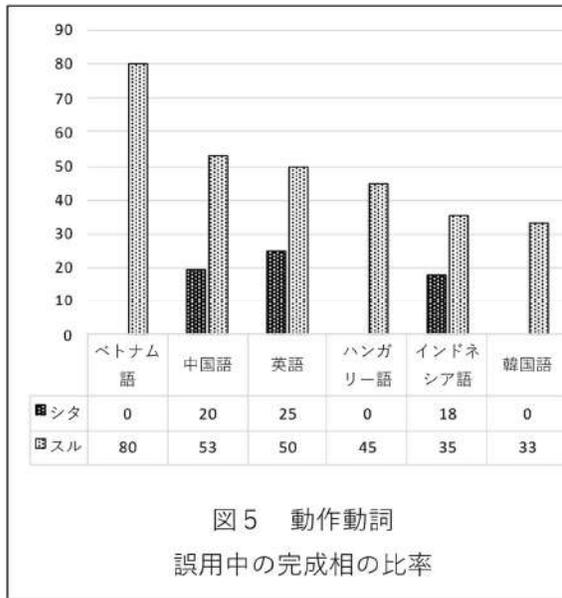
	韓国語	英語	ハンガリー語	ベトナム語	中国語	インドネシア語
動作動詞 VS. 変化動詞	89<91	81<91	46<57	84>36	58>33	45>31

この表からは、英語話者と韓国語話者が動作動詞と変化動詞のどちらも高い正答率を示しており、進行中と結果残存の習得がともに進んでいることが分かる。また、ベトナム語話者は、動作動詞の正答率が84%と高いのに対し、変化動詞の正答率は36%と激しく落ち込んでおり、進行中の習得に比べて結果残存の習得が大きく遅れていることが分かる。また、表2の不等号記号が示すように、韓国語、英語、ハンガリー語のグループは動作動詞より変化動詞のほうが、ベトナム語、中国語、インドネシア語のグループは変化動詞より動作動詞のほうが高い正答率を示している。これまでの研究では進行中のほうが結果残存より習得が容易であると言われていたが、6つの言語の話者グループのうち3つの言語の話者グループで変化動詞の正答率のほうが高かった。このことを考えると、進行中の習得のほうが容易だとは一概に言えないことが分かる。

アスペクト仮説では、母語の別にかかわらず習得の初期段階において継続相の形態が活動動詞（activity verbs）と強く結びつくことを主張し、日本語においては結果残存よりも進行中のほうが先に習得されると述べている。しかし、表2の結果はアスペクト仮説とも矛盾する結果となっている。

#### 4.4 継続相を使うべき箇所 completion を用いた誤用

結果残存のテイルを使うべきところで完成相のシタを使った誤用が多いことは、これまでの研究でしばしば指摘されている（黒野 1995、小山 2004、Sugaya & Shirai 2007 など）。アスペクト仮説ではこの現象について、達成動詞（achievement verb）が過去形の使用と結びつきやすいという普遍的な習得パターンに即した現象であると述べられている。このように、完成相のシタを用いた誤用に関しては先行研究の指摘が多いのに比べ、完成相のスルを用いた誤用を調べた研究は、管見の限り、中国語話者を対象とした簡・中村（2010）以外に見当たらない。そこで、この節では、継続相のテイルを用いるべきところで完成相のシタを用いた誤用の他に、スルを用いた誤用についても調べることにする。図5は動作動詞に関する誤用、図6は変化動詞に関する誤用である。どちらの図も誤用全体に対するスルとシタを用いた誤用の比率を示したものである。



これら2つの図から明らかなように、動作動詞においてはスルを用いた誤用が多く、変化動詞においてはシタを用いた誤用が多い。図5の動作動詞に関する誤用では、ベトナム語話者の80%がスルを用いたものである。また、中国語、英語話者、ハンガリー語話者では、誤用のうちの45%~53%がスルを用いたものであり、進行中を表す時に誤ってスルを使う誤用が多いことが分かる。一方、図6の変化動詞に関する誤用では、ハンガリー語話者の誤用は全てシタを用いたもので占められている。続いてベトナム語、中国語、韓国語話者が60%を超える高率でシタを用いた誤用が出現している。このことから、継続相を表すのに完成相を用いたことによって生じる誤用は、進行中ではスルが、結果残存ではシタが多く出現することが分かる。また、進行中にスルを用いた誤用率の平均は49%、結果残存にシタを用いた誤用率の比率は67%であることから、結果残存の場合のシタの誤用の方が多いことが分かる。しかし、進行相にスルを用いた誤用が全体の誤用のうちの49%を占めていることも見過ごせない事実である。進行中が動きの終了前の継続状態を表し、スルが完了前の未然を表すということから進行中とスルを混同する学習者が多いのかもしれない。この点についてはさらなる調査と検討が必要である。

## 5. 母語別の特徴

最後に、以上の調査結果をまとめる形で、それぞれの母語話者の特徴を示すことにしたい。

1. 中国語話者：変化動詞の正答率が低い。また動作動詞の正答率もあまり高くない。このことから、進行中のほうが結果残存よりは習得が進んでいるが、どちらも十分な習得には至っていないことが分かる。また、動作動詞の場合にスル、変化動詞の場合にシタを使った誤用が多い。
2. 英語話者：動作動詞、変化動詞ともに正答率が高く、進行中と結果残存の習得はバランス良く進んでいる。わずかではあるが、動作動詞の誤用のほうが多く、進行中の方が先に習得されるというアスペクト仮説と矛盾する結果を示している。ただし、英語話者の人数は9名と少数なので、さらに人数を増やして調査する必要がある。

3. ハンガリー語話者：動作動詞、変化動詞ともに正答率があまり高くない。変化動詞の誤用はすべてがシタを使ったものである。わずかではあるが、動作動詞の誤用のほうが多く、進行中の方が先に習得されるというアスペクト仮説と矛盾する結果を示している。
4. インドネシア語話者：テイルの使用が最も少なく、動作動詞も変化動詞も正答率が低い。進行中、結果残存の習得はどちらも遅れている。
5. 韓国語話者：動作動詞、変化動詞ともに正答率が高く、進行中と結果残存の習得はバランス良く進んでいる。変化動詞の場合にシタを使った誤用が比較的多く観察される。わずかではあるが、動作動詞の誤用のほうが多く、進行中の方が先に習得されるというアスペクト仮説と矛盾する結果を示している。
6. ベトナム語話者：進行中は正答率の高さから習得が進んでいることが分かるが、それに比べて結果残存の習得が大きく遅れている。また、進行中の誤用にスルを使ったものが多くを占める。

## 6. まとめ

第二言語の文法形式の習得には母語の文法と目標言語の文法との異同のほか、教室や日常生活でどのような目標言語にどの程度接しているかというインプットの質や量が関係する。また、峰 (2019) や Sugaya & Shiraishi (2007) は、結果残存の習得を困難にする要因の一つに、完成相のシタや「他動詞+テアル」といった競合する相手の存在を挙げているが、この指摘にあるように、特定の形式と意味のマッピングが一对一対応をしているかどうかということも関係する可能性がある。さらに、手続き的知識を要求される即興的発話なのか、宣言的知識を活用できる時間をかけた作文や文法テストなのかといったタスクの違いも、正用や誤用の現れ方に違いを生じさせる要因となる。アスペクト仮説、プロトタイプ理論、処理可能性理論など普遍的な習得パタン存在を仮定する理論の妥当性も、これら多数の要因の影響を考慮に入れて検討しなければならない。

本稿は、これら複雑な習得の要因の中から、母語の影響と動詞の語彙的アスペクトという点に焦点を当ててテイルの習得に関する調査を実施した。その結果、母語によって5節に述べたような異なる特徴がさまざまに見られることが明らかになった。J-CAT の得点で中級後半と判定された学習者集団であるにも関わらず、母語によるこのような異なりが見られたことは、テイルの習得に母語が大きく影響していることを裏付けている。しかし、それぞれの母語の何が要因となってテイルの習得に影響を及ぼしているのかといった点については、中国語など限られた母語話者の習得が研究されているだけである。この問題を明らかにするには、日本語と学習者の母語との対照研究、日本語のインプットの実態調査、学習者に課すタスクの精査など多方面からの分析を行い、それらを統合する形で一步一步研究を深めていく必要がある。

## 使用したコーパス

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』(中納言 2.4.5 データバージョン 2021.05)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2021年12月28日)

## 付記

本研究は国立国語研究所の共同プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」の研究成果の一部である。

## 参考文献

- 庵功雄 (2021) 「現代日本語のテンス・アスペクト体系におけるテンス表示部の機能について」庵功雄・田川拓海 (編) 『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 2』, pp.51-69, ひつじ書房
- 稲垣俊史 (2011) 「中国語話者による日本語のテンス・アスペクトの習得について——アスペクト仮説からの考察——」 『中国語話者のための日本語教育研究』 2, pp.15-26.
- 今井新悟 (2015) 「第 4 章 J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test)」李在鎬編『日本語教育のためのガイドブック』, 67-85, くろしお出版
- 奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 簡卉雯 中村渉 (2010) 「台湾人日本語学習者の「ている」の習得に関する縦断研究：「結果の状態」の用法を中心に」 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 5, pp.83-92.
- 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断的研究」 『日本語教育』 95, pp.37-48.
- 許夏珮 (2000) 「自然発話における日本語学習者による「テイル」の習得研究—OPI データの分析結果から—」 『日本語教育』 104, pp.20-29.
- 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者におけるテイルの習得について」 『日本語教育』 87, pp.153-164.
- 小山悟 (2004) 「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性——母語の役割と影響を中心に——」小山悟・大友可能子・野原美和子編『言語と教育：日本語を対象として』, pp.415-436, くろしお出版
- 菅谷奈津恵 (2004) 「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究——L1 の役割の検討——」 『日本語教育』 123, pp.56-65.
- 砂川有里子 (近刊) 「第 8 章 テンス・アスペクトの習得と指導法—中国語話者のテイル使用の経年変化をもとにして—」張林・野山広・石黒圭・岩崎拓也編『北京日本語学習者縦断コーパス「B-JAS」と日本語の教育研究』北京師範大学出版社
- 冉露芸(2021)「中国語テンスの特徴から見るテイル形の日中対照研究」 『一橋日本語教育研究』 9, pp.31-45.
- 陳建璋 (2015) 「台湾人日本語学習者によるアスペクトの習得について——「テイルの用法」と「動詞タイプ」の影響に関する縦断的考察——」 『日本教科教育学会誌』 38(3), pp.77-90.
- 峯布由紀 (2019) 「文脈の時間の流れを表すテイル (ル) の習得について—異本語の発達段階における位置づけ—」 『日本語教育』 173, pp.61-68.
- Sugaya, N., and Shirai, Y. (2007) The Acquisition of progressive and resultative meanings of the imperfective aspect marker by L2 Learners of Japanese: Transfer, universals, or multiple factors?. *Studies in Second Language Acquisition* 29(1), pp.1-38.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.